

私は子どもたちが大きくなってしまってもこの習慣はやめることは考えられない。

道徳教育といっても、幼いころ、子どもはまだ家庭を生活の本拠としているころは、ほんの下地を整えることしか出来ない

中学生の生活指導

内田安久

小学校時代は素直ないい子だったのに、中学生になったらだんだんいけなくなってきた。いうことはきかず、口答えはする。妙な理屈をならべて逆にくってかかる。しかもすることはしない。そうかと思うと、すぐにふくれてふてくさり、口もきかないでソッポを向く。それをこちらから強く出ると、どんな無茶をも平気でやっつけてしま

う。「いったいどうしたらいいんでしょう。これが新しい自由教育というものなのか。すか。」という親の声をしばしば聞く。

い。でも、次々とよい心が芽ふくような、立派な下地を整えることは、母親の仕事の中で、一番崇高で、永遠の楽しみでもあった。そしてその根本は、えいちにあふれた、かぎりない母の愛情である。(母親)

これは家庭内ばかりのことではない。悩みは学校内にも山ほどある。物はこわれる。規則はまもられない。開襟シャツをだらしなくズボンの外にはみださせてアロハのようにして着ているので注意をするところ。「この方が涼しくて衛生的です。学校ではなぜ合理的な生活をさせてはくれないのですか。」と逆襲する。かまわないでおけば放縱になるし、締めると人権尊重にもとると叫ぶ。むずかしいのは中学時代のとり扱い方である。

もう単なる子どもではないので、力づくだけでは押しにくい。ばあいによると腕力

ではかえって子どもの方に利のあることもあり得る。それにこのころはひじょうに感情もたかぶりやすいので、あまりこちらが強くと、乱暴したり家出したり、ときには自殺もやりかねない。そうかと思うと先方でチャンと心得ていて、こちらの裏をかくものもある。叱られそうになると先まわりしてあやまつたり、中には「そんなに叱らないで置いて下さい。いまはちょうど反抗期なんだから、叱られれば叱られるほど反抗したくなるんだ。放っておけば、いまによくなりますよ。」と逆説法する早熟型さえある。よほどシツカリしていないと先生もあぶない。

こうした状態にあるものを、じゅうらいの修身のようないき方で教育しようとしても、うまくいかないのは当然であろう。社会が悪いのだ、社会に責任がある。だからまず社会をよくしてからなければという人もある。たしかに一面の真理はある。いかに家庭や学校でやっきとなって努力しても、世間一般が絶えず悪い影響をおよぼしているのでは焼石に水である。しかしそうかといって、まず家庭や学校でその教育に

努力しないで、どこで指導の効果を期待することができよう。

それには、どのような指導方法をとった方がいいか、これが切実な問題である。ただ、こうした問題は、単に形式的なやり方だけで解決するものではない。題目的な徳目をならべて、それについての説教をくりかえしたからといって効果のあがるものではない。そこで実質的ないき方としては、まず中学時代にはなぜそうした傾向が発生しやすいのか、その原因を追求して理解をふかめ、その線にそって指導のみちを見いだしていくことが一番いいのではあるまいかと思うのである。

それについて現代の青年心理学では次のように説明する。中学時代は少年期から青年期にうつるちょうど過渡期にあたっている。この頃には心身が急激な発達をして性的成熟の段階に入りだす。これは真の一個の人間になる道程を意味するものであって、この頃から個性がはっきりとしていくことになる。別のことばでいえば、この頃から徐々に自我に目ざめはじめていくのである。

それまでは自我中心にうごいてきていたのだが、自分によって動いていたのであって、自分はどんなものかというようなことを自覚して動いていたとはいえない。それを自分について考えだすようになるのが、この青年前期なのである。

それには、まず最初は自分の身辺について関心をもつようになることから始まることを見ていい。身体が大きくなることに関心をもち、身体の異変に気をつかう。そこに好奇心や疑惑や心配や誇りやあせりや、いろいろな気持が混合して経験されるようになる。そこで自分はこんなことでいいのか、自分はどうあったらいいのかというようなことが心の底に低迷しだす。なんとなく不安な落着かない気分が心をゆすぶる。そこで自分の顔かたちや身なりなど外面的のことにも気をつくばると同時に、他人にたいしても気をつかうようになる。それは一つには自分と比較する意味であり、また一つには自分の不十分さをみられたくない意味からでもある。

そのため煙幕をはるようになる。自分をりっぱなものに見せようとして、おとなぶ

ったり、えらぶったり、美しそうにみせかけたりしたがる。内容の貧弱さをかくすための見栄や虚勢が、いわゆる「気どる」「てらう」「生意気ぶる」すがたとなってあらわれてくる。のめもしない酒や煙草をむりに飲んでみせるのも、ひとかどのおとなになったようにみせかけようとする一種の心理である。わざわざぎざな服装や態度をして不良っぽい様子をして得意がるのもどうようである。近來とくに増長したように思われるティーンエージャーの非行犯罪の多くは、こうした浅薄な心理からうまれたものとみられるものであって、その犯罪原因があまりにも単純な馬鹿らしいものであることから、うなずけるであろう。往來ですれちがった相手がこちらをジロリと見たというようなことからでも殺人事件がおこるのである。

自分の正体をつかまれない心理が消極的にはたらくと、自分を逃避させようとする動きとなる。それが「恥かしがる」「はにかむ」「てれる」のすがたである。中学時代には、こうした傾向がひじょうによくあらわれてくるので、表面的にはその真

意がくみとれにくいばあいが少なくない。黙っておとなしくしているから、なにも問題は無いのかと思うと、それどころでなく、内心は前にのべてきたような複雑な心理状態にある——強い弱いは別だが——ことが少なくないのを見のがすことはできない。

こうして自己を防衛すると同時に、自分というものをシッカリつかもう、確立させようという欲求が、自分を他から引きはなして独立の立場におこうとする。そこで孤独を好み、他人から世話されたりすることを拒むようにもなる。両親から離れようとするのも、そのためである。これを「心理的離乳」といっている。お母さんと一緒に肩をならべて道をあらくことをいやがる。細かく世話を焼かれたりするのを避けたがるのもこのころのことである。

このような傾向が強く表現されると反抗となる。だからこの時分の反抗は、自分の身辺に親近な関係をもっているものに対するほど著しいともみられる面をもっている。両親、兄弟、先生などにたいして特につよくあらわれがちになる。けれどもその

反抗の意味が、根本は自己の不安定さをシッカリしたものにしようとし、そのため他から自分を保護しようとするものであるから、相手がどうであるかということよりも、むしろ自分の心の動きによって相手に無暗に反抗するといったような性質なのである。だから自分でも、なぜ反抗するのかハッキリしないでいる場合が案外に多い。理屈はその場であみだすのである。だから理屈にならない理屈をいったりもする。それが議論中になんだん理屈らしくかたちづくられることにもなるから、警戒を要する。

こうした反抗現象は幼時四、五歳の頃にもみられるので、それを第一反抗期といひ青年期のを第二反抗期とよんでいる。幼時のは徹底した自我主張であるが、それはじゅうらい自分と自分以外のものとの関係がごたごたに考えられていた、それをハッキリ区別して考えられるようになるため、強く他にぶつかってみるという、いわば外部関係をj知るための外向的反抗なのだともいふことができる。それゆえそのころのとり扱いは、その反抗によって外界にはいかに困

難が多いかを知らせる意味でのより強い障害を経験させる方が好ましいのである。

ところが第二反抗期のばあいは、素因がむしろ自己内面の整備にあるとみられるので、外面的にこれを処置しようとしてもうまくいくはずがない。内省の余地を全然あたえず強引に外面から一方的に固めていこうという軍隊式の教育が、一面の効果はあげながら、なおかつ破綻をふせぎえなかつたことを考えるべきである。だが甘やかして放任しておいたならどうなるか。おそらく健全な自己の確立はむずかしからう。

従ってその指導法としては、内面的自己を安定させることに主眼をおき、なるたけ事のわけを納得させるように話しあうのである。相手の気持を理解してやって、その難点を要点的に知らせてやる。ただし押しつけもしないし長談義もしない。相手の人格を認めながら道義と結んでその責任感を覚醒させる注射を内心に送りこむのである。注射は痛いがよく利くはず、薬は診断の結果にまたぬといけない。

(お茶の水女子大学付属中学校)